

## 3. あたらしい憲法のはなし・民主主義 上下

(※ 関連資料のある箇所は太字で示してあります。)

### 3. 日本の国語改革

【木 田】教科書局におるときに、かかわったのはそういうことなんですが、国語という問題については、隣で国語課というのができていて、当用漢字ですね、これなんかは非常に早く制定されておりますから、日本の国語改革というものを、かなり漢字数を減らせということについて、960 何字でしたかね、教育用常用漢字をつくって、あといろいろと字体を変えるとかということまでずうっと、これは年代を比べてみると、昭和 21 年ごろに相当仕事が進んでいると思います。でも、ローマ字の時間を 200 時間はそのころは使っていたと思います、1 年間で。だけでも、やっぱり日本人というのはローマ字にするわけにいかんし、英語にするわけにもいかんですわねえ。今、半ばまじめに文部省が取り組んでいるので、なんてつまらんことをしてとったりしていますけれども。しかし、本当に日本の国語・国字という問題を、教育の世界でもうちょっと真剣に考えなきゃいかんのかなあというふうに思います。私は不思議でしょうがないんです。

聖徳太子の 17 条の憲法からして、あれ日本語ではないんですよ。ですから、当時の中央におられた人たちというのは、中国の言葉で用を足しておられたんだと思います。ですので、日本語を守ってきたのは女性群だと思んですよね、紫式部だとか。日本語というのはある意味でこんな不思議な言葉はないなあと。すばらしい言葉というのもないし、漢字というのは、これは訓読みにしたりどうかして大変うまい使い方をしているなあ。そのことがアメリカの人にはなかなかすぐのみ込めない。どうしてこんな難しい字をつくって、一部の人間しかわからない言葉を使うから、日本というのは右に走っちゃうんだと、こういう発想ですよ。そこで、国語研究所のことで言うておかなければいかんのは、アメリカさんが立派だなあと思うのは、日本語の識字力の調査をやりましょうということになったんです。ですから、この間亡くなられた先生なんかもそうですが、統計数理の所長をやっておられた林知己夫さんといったかな、日本の学者で一緒につくって、日本中で 200 ばかりのサンプルをとってですね、識字調査をやったんです。

そのときに、アメリカの会社の職員まで駆り出して使って、日本の研究者も相当集められてね、いやあ、かなりのいいお手当をもらって、わしの月給よりはよかったよと言う先生が大分おられますけれども、200 ばかりのサンプルを使って、ずうっと識字調査をやったんですね。そしたらね、アメリカより、うんと識字率がいいんですよ。それでとうとう、そのワーワー言っていたやつが引っ込めちゃったわけです。しかし、あれはやっぱり効きましたなあ。その後、識字調査というのは、一つもやってくれんなあと思って残念に思いますけどもね。アメリカさんの偉いところは、そういう現実に調査をして押えてみて、あっと思うと引っ込めるんですね。国語研究所というのは、本当は国語研究所ができる前にいい仕事をしていたね、できてからは何をやっとなだと、いつも僕は文句を言っていたんだけれども、できる前にもう仕事は済んじゃったような感じになっちゃったんです。国語研究所は昭和 23 年 3 月(設置)。

【後 藤】早いですね。

### 3. 日本の国語改革

【木 田】早いです。そして、そのときの研究所長というのはね、法律では人事院の総裁と同じ書き方になっているんです。絶対に権威者が座ってきちっとやって、文句を言わさないというのが国語研究所設置法のつくり。それをつくるときに、そのちんぴらどもがGSまで行ったわけですよ。GSまで行くというのも初めてだったんだけど。占領中のことというとなんなことですかねえ。やっぱり国語の改革というのは、もう少し歴史としては今日の書体、その辺がどういうふうに動いてきたかということを押さえていただきたいなあと思います。できたら、やっぱり日本語をもう少し大事にしてもらいたいなあ。今は言葉が崩れているという感じですよなえ。

【後 藤】その当時、ローマ字論者というのは、大分おったわけでしょう。

【木 田】おりました。

【後 藤】あちこちにおりましたか。

【木 田】仮名文字論者もいましたしね、国語審議会は、隣から聞こえてくるのを聞いていて、なかなかにぎやかでしたよ。

【後 藤】一番印象に残っているのは大塚明朗先生ね、亡くなる2、3年前のことですが、ローマ字でねタイプを打っていただいたんですよ。

【木 田】そうですか。あの先生は理科の先生でしょう。

【後 藤】けれども、もうローマ字協会の会長さんでした。

【菊 川】年賀状はいつもローマ字でいただいてました。

【木 田】それはやっぱり、その意味では今はタイの専門家石井米雄さんがおられますなあ。外交官からタイ語を勉強されて、そしてタイの文化をおやりになって、文化功労者をお受けになった。しかし、少数民族の言葉というものをいかに大事にしなければならんかというお話をしておられますけど、日本は少数民族じゃないけれども、やっぱり言葉というものが文化の基本だということは少し考えて真剣にやってもらわんと、学生さんの言葉も乱れてしまうし、くしゃくしゃになりますよなえ。この戦後の国語改革という問題は、司令部から加わった圧力よりもローマ字化の動き、そういうことに対してどういうふうに対応していたかということと、途中で日本はもう息切れしてほうりっ放しになったように、言葉の問題があり、コンピュータ任せという方向へ行っちゃっているわけだけれども、こここのところはちょっともう一遍仕切り直していただきたいなあというふうに思いますが。それで、第2段目は切りましようか。